南欧の風に吹かれて

（天正遣欧少年使節の足跡を辿る旅）

地球上には不思議とくつろぎ、気が満ち、力がみなぎりパワーがもらえる場所がいくつかある。宇宙と自然（じねん）と自分との一体感の中で自分の魂が洗われてゆくことに気づく空間。

古代より聖地や寺院や教会はそんな所に建っていることでもわかる。

南欧の風に吹かれていると、見はるかす地平の向こうに、幻かも知れない夢を求めて旅、また地球を歩き続けることにしました。

南島原市　木村優仁

行　程　表		
８／１（水） ８／２（木）	出国	長崎空港　→　関西国際空港 関西国際空港　→　パリシャルルドゴール空港　→　リスボン空港
８／３（金）	・エヴォラ	＊エヴォラ市長表敬訪問　＊エヴォラ市の皆様と会食 ＊ディアナ神殿＊エヴォラ美術館＊エヴォラ大聖堂＊エヴォラ大学 ＊サン・フランシスコ教会＊人骨堂 ＊エヴォラ市の皆様と会食
８／４（土）	・シントラ・リスボン	＊シントラ王宮 ＊サン・ロッヶ教会＊ジェロニモス修道院（世界遺産）
８／５（日）	リスボン・ナザレ コインプラ	＊ノッサ・セニョーラ・ダ・ナザレ教会 ＊新カテドラル＊旧カテドラル ＊涙の館＊コインプラ旧大学
８／６（月）	コインプラ・リスボン ローマ	リスボン空港　→　ローマ空港
８／７（火）	ローマ・バチカン市国 ローマ	＊バチカン市国＊サンピエトロ大聖堂 ＊バチカン美術館＊システィーナ礼拝堂 ＊ラテラノ教会＊ジェズ教会
８／８（水）	ローマ・カステルガンドルフ・キエーティ	＊ローマ法王庁避暑地（カステルガンドルフ）にて法王に特別謁見 ＊島原手延そうめんを献上 ＊大司教との特別会見 ＊キエーティ市長表敬訪問（バルベッラ美術館にて） ＊歓迎レセプション（ローマ時代の遺跡の真中にて） ＊自衛隊の音楽祭に参加＊クラシック音楽会にご招待 ＊現地学生との交流＊ホームスティ ＊８人の使節は、各ホストファミリー宅へ
８／９（木）	キエーティ・ローマ	＊キエーティ市（ヴァウニャーン神父ゆかりの地） ＊サン・ジュスティーン広場 ＊マッルチーノ劇場＊美術館 ＊キエーティ市の皆様と会食（財団前の広場） ＊ホームスティ先の人たちとのお別れの会
８／１０（金） ８／１１（土）	帰国　ローマ発 日本着	レオナルドダビンチ空港　→　パリシャルルドゴール空港 関西国際空港　→　長崎空港

リスボン空港

ローマ法王に献上

セビリアの聖母銅版画

ハイブリッド輪状二層めん

出発式（市役所本庁前）

公式のポロシャツ

エールフランス航空機は、高度三千メートルを保ち、水平飛行にはいり２０分ほど飛び、街路灯がぼんやりと球状に連なったように見える町並みの上空をゆっくりと高度を下げてリスボン空港に着陸した。タラップを降りると、地中海よりの南欧の乾いた風が流れてくる。

この旅は、平成９年に遺跡文化事業街おこし推進事業の事務局及び推進委員（スペインとの交易担当）として、両国相互に交易担当者を常駐させる計画で、ジェトロなど廻わり事業を推進していた。同時期に銅版画が復元され、急遽ローマ法王に献上することとなり平成１０年１２月２１日からの訪問でした。だが諸般の事情にて参加できなかった思い出があります。

その模様は、１９９８年（H10年）１２月２３日、バチカン市国はパウロ６世ホールにて、ローマ法王ヨハネ・パウロ２世の壇上に上り持参した銅版画を手渡された。法王は、説明を聞き終えると、右手を版画の上にのせ、「ながさき　ありがとう」とはっきりした日本語で労い言葉を言われたそうです。版画が「セビリアの聖母」と呼ばれる由来は、スペインのセビリア大聖堂内に描かれた「アンティグア（古代）の聖母」という有名な壁画を模しているからです。コロンブスもその壁画の前にひざまづき、そしてお祈りして航海に出たといいます。墓はこの聖堂内に安置されています。

そこで、銅版画の復刻版と共に、わたくしの監修製作した「ハイブリッド輪状二層めん」を献上してもらうことにしました。この輪状二層めんは、通常同一麺帯であるが、異質の麺帯の組み合わせであり、外が固く中心にゆくほどやわらかい「ふくよかな食感」を追求し、伝統的な製法に新たな技を加え完成させています。お湯の浸透が早いので茹であがりが早く、煮くずれ及び茹でのびしにくい特性を持ちます。異質麺帯の最大利点を極限まで引き出した世界に例がない手延べ製法による特殊麺です。ラー王が機械の二層麺ですが、その以前に開発した画期的な特殊手延めんです。その麺を桐箱、和紙、線香巻き、２本だけを白絹で包み、桐箱を紫絹布で包み、５箱作成して１箱を手元に置き、４箱を送り出しました。ローマ法王に献上、スペインセビリア大聖堂に献呈、セビリア市長に贈呈、セビリア商工会議所会頭に贈呈のためです。

「幾多の迫害や重税に堪え忍び、農業の副業として携わってきた手延べそうめんも、地球上最大の産地を形成するに至りました。明日を夢見た先人、命を支え続けながら食文化の歴史を育み、そして味わいの中に幾世代の心を今に伝える島原手延べそうめんを、ここに献上いたします。」 本文は桐箱の中蓋に刻印した原文です。

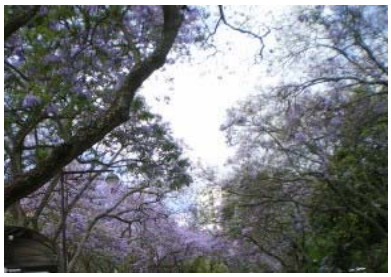
このような機会が、私の人生に再度巡ってこようとは思ってもいませんでした。口之津開港450年記念事業として「平成遣欧少年使節」が南欧に派遣されることとなり、わたくしも同行させてもらうことにいた
しました。天正遣欧使節の足跡を辿るもので、ポルトガル、イタリア、バチカン市国を１１日間かけての訪問です。

当時と同様に北有馬にあった日本初の神学校セミナリヨを再現して２２名の中より南島原市４名、全国より４名を選出されました。市役所本庁前での出発式には、市の関係者や市民やテレビ・新聞社など多くの方々が見守る中、長門副市長の激励の言葉、藤原団長（市長）の挨拶、続いて少年使節を代表して、隈部亮佑君が決意表明した。バスは、長崎空港にへと向かい、空港で大分の深野果南さんと福岡の浅野未来さんと合流して関西空

関空～パリ間の機内にて

コルク樫

コウノトリの巣



ジャカランダの青紫の花の並木

ローマ時代の風呂

エヴォラ市長の歓迎の挨拶

港に飛び立った。大阪では、東京の近藤聡一郎君と神奈川の森田洋史君と合流した。エールフランス航空機は、パリのシャルルドゴール空港を目指して飛び立ち、１２時間３０分後に到着。乗り継ぎして２時間３０分でリスボン空港に着き、時計は２２時を過ぎていた。荷物を受け取りホテルに向かうが全員がお腹が空いている。１２時間以上も乗ると、食事は3回くらい出ていたが、軽食を入れて２回出て、後は飲食コーナーが２ケ所設けられ、自由に飲食ができるように成っている。食事後の３時間後にオープンしますと、案内されたが、利用する人は少ない。私が説明して利用する人も多かった。その間乗務員は、特殊ドアから下の階にみんなが降りていってしまう。時折上がってくる乗務員を捕まえてオーダーすると、いろんな引き出しから食べ物や飲み物を出してくれる。暖かいコーンスープとサンドイッチをもらった。

リスボン空港出口で市長を呼ぶ声が聞こえた。南島原市有家町出身の音楽家の豊島さんだった。娘のソプラノ歌手豊島文さんは、イタリアピアチェンツァ県に在住されている。これよりオリンピックを見にロンドンに廻るとのことである。本空港は、リスボン市の北にあり、市街地と近接しているためアクセスはよいが、市街地の直上を通るため、騒音も激しく拡張もできなく離着陸も危険を伴う空港であり、何度か移転を考えたが、そのままという。

次の日の朝、ホテルを内を散歩すると、プールがあり建物や部屋も綺麗である。朝食は、堅いパンで野菜が少ないので、日本人には向かないと思うが、食べないと日程表には日本食の設定日もない。

最初の訪問地のエヴォラに向かう。ガイド兼通訳は入江ミサさんで、バスの中でポルトガル語の勉強とバスから見える風景の案内である。高速をひた走ると、周りはコルク樫の木ばかりである。ポルトガルは世界のコルク生産量の７０％を有すると言われ国の保護樹木に成っている。植樹後２５年ほどたってから最初の剥皮があるが、最初の皮はデコボコがあって適さないので９年毎に剥皮されるそうです。少年使節は、４日間かけてエヴォラに着いており、１日は川遊びをしている。時折、高圧線にコウノトリが巣を作っており、夏にポルトガルで過ごし、冬にはアフリカに行くらしい。入江さんがポルトガルジョークを言い出した。親子の会話で、父親が息子に「カタツムリを捕まえてこい。」と言ったら、２時間後に１匹捕まえてきた。たったの一匹かと言ったら。息子は「２匹目を捕まえようとした間に１匹目に逃げられたから」と言った。日本人の感覚と違うように感じると言われたが、私なら、取るのが面倒だからお店より２匹を買ってきました。「買ったツー（２）もり」と。

高速を降りてエヴォラに近付くと、ジャカランダの青紫の花の並木が続く。ホテル前で降りて市役所まで歩く。狭い石畳の道を車が速いスピードでひっきりなしに通りすぎる。みんな窓を開けており、涼しいのだろう。陰に入ると風が心地よい。馬車が観光客を乗せて時折、通っていく。

エヴォラ（Évora）市は、ポルトガル南東部アレンテージョ地方にある町で人口は５万５千人で５ｋｍの城壁で囲まれた町である。スペイン国境に近い。ローマ帝国時代からアレンテージョ地方の中心地として栄え、ルネサンスの時代には、大学もおかれた学芸の町で、1584 年 9 月には、天正遣欧少年使節が立ち寄った町でもある。1986 年 UNESCO の世界文化遺産に

藤原市長の挨拶

プレゼントの交換

ポルトガル大使

大使夫人(左)市長夫人(右)

会食の風景

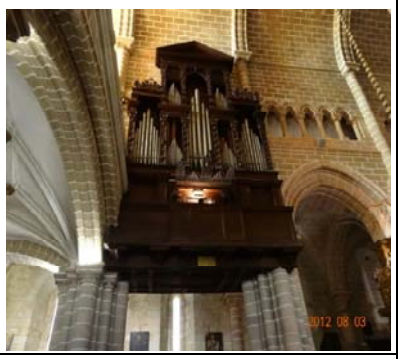
ホセ・エルネスト・オリベイラ市長

登録されています。

市役所に着くと関係部署の職員さんに出迎えてもらい、挨拶後、すぐに市役所改装工事の時に偶然にローマ時代の風呂が見つかったと、そちらを先に案内された。丁度、飛行機の中で阿部寛が古代ローマ人を演じる“風呂映画”『テルマエ・ロマエ』(ラテン語で“ローマの風呂”の意味)を見てきた。ローマ人にとって公衆浴場は社会生活の重要な一部で公的施設として建設され、貧富の差を問わず誰でも利用できた。飲食、運動、読書、商売、議論などができる場所だった。外国人になぜ毎日公衆浴場に行くのか訊かれ、ローマ皇帝は「1 日に 2 回行くだけの時間をとれないからだ」と応えた皇帝は市民を喜ばせ、自らの名声を後世に残すために公衆浴場を築いた。裕福なローマ人はローマ市民の名声を得たいとき、公衆浴場を 1 日貸切にして一般に無料公開したらしいと説明を受けて写真を数枚取った。

二階に案内されて指定位置に着いていると、エヴォラ市長と副市長が入って来られ、その後に日本人夫婦と秘書のような方が続いて入ってこられた。それは、ポルトガル特命全権大使の四宮夫妻と一等書記官の近藤さんだった。両市の挨拶後、両市の紹介、エヴォラ市はビデオにて紹介された。エヴォラ市長は、「本日、このようにして皆様を歓迎することを誇りを思います。本日の会を実りあるものにしたい。また、四宮大使のご協力に深く感謝申し上げます。そして皆様にエヴォラを紹介する機会を与えていただきうれしく思います。この会の意義は２つあります。ひとつは、互いの歴史的遺産を若い人たちが守り伝えて行くこと。もうひとつは、日本の若い人にエヴォラの町を知っていただく機会をもてて嬉しいことです。４少年使節が本市に立ち寄り文化的知識を習得されたことに大きな意義があります。最後にもう一度、藤原市長並びに一行様、昔からもともとあった友愛を今後も続けていきたいと思います。四宮大使ご夫妻ありがとうございました。今後も両市の友好を続けていきたいので、ご協力を切にお願いします。」とあった。続いて藤原市長は、「盛大に歓迎していただき感謝申し上げます。続いて歴史的流れとエヴォラ市との関わりを説明して、今後の両市の歴史的繋がりだけではなく経済的交流を提案して挨拶とされた。(歴史的内容は省略)」意見交換では、わたくしは、麺文化に触れた。「南島原市は、麺では世界最大の麺の産地を形成しており、多種多様の麺が生産されているが、こちらにはどのような麺がありますか。」の質問に市長は、「小麦粉を利用してはパンが中心であり、麺と言うものはない。そうめんとはどのようなものか。」とあったので、市の職員さんが土産用の島原手延そうめんを開封して市長に手渡す。私が「たっぷりのお湯でゆがき、水洗いして、夏は冷やしてトビウオや鰹のだしで食べる。」と答えたところ市長は「早速家で食べたいと」と話された。プレゼントの交換して、藤原市長は、「９月２２日・２３日の口之津開港４５０年記念事業にご招待したい」要請された。続いてポルトガル特命全権大使の四宮大使は、「両市の友好親善を最大限にバックアップしたい。式典にも参加したい。」と言われ、プレゼントを渡された。全員にて市役所の入り口で記念写真を撮り会食会場に向かった。レストランの前の町の真中にローマ時代のディアナ神殿がある。ディア ナ神殿は２世紀末のローマ時代に造られたコリント様式の遺構で花崗岩の円柱１４本が残っている。柱頭が崩落した柱もありますが、イベリア半島に現存するローマ神殿の中では保存状態はいい方と言われている。

ディアナ神殿



エヴォラ大聖堂のパイプオルガン

現地の子どもたち（交流会）

エヴォラ美術館

サン･フランシスコ教会

エヴォラ大学

月の女神ディアナに捧げられた神殿で、円柱の基台と柱頭には近郊のエストレモスで産出された大理石が使われている。

午後からは、子供たちは、現地の生徒たちとの交流会である。その間大人たちは、近くの遺跡などを見学した。再度合流してエヴォラ大聖堂に向かう。１５８４年９月に天正遣欧少年使節は訪れ、イエズス会のエスビリト･サント学院に１週間滞在し、天正遣欧少年使節の伊東マンショと千々石ミゲルがパイプオルガンの演奏の腕前を披露して喝采を浴びた。お世話に成ったブラカンザ家は、ポルトガルで最も有力な一族で、ドン・テオトニオは、ブラカンザ公爵の息子であった。壁に取り付けられたオルガンはイベリア･パイプオルガンといい、ヨーロッパに２台しか現存していなく弾ける人は世界中でも数少ない。

エヴォラ美術館は、１４世紀の受胎告知の像や１６世紀の三位一体の像、大理石の女神の浮き彫りなどが展示されている。

●サン･フランシスコ教会

16 世紀の初めにフランシスコ派の修道士のために建立されたゴシック様式の教会で、正面の祭壇は大理石で、左右にはサンタ･ルチアとサン･アントニオの像が安置され、周囲の壁にはフランシスコ派の物語が描かれていました。教会内の両側にマリア像などの礼拝堂が並びガラスケースに黒衣の女性が横たわっています。隣接して人骨のチャペルがあることで知られています。

「人骨の家」と呼ばれる礼拝堂の入口には「みなさんを歓迎します」との碑文があります。壁や柱が 5000 体もの人骨で埋め尽くされ、写真撮影は有料でしたが、特別に無料にしれくれました。気分が悪くなり写真を枚撮りましたが、すぐ外に出て破棄してしまいました。

続いて行ったエヴォラ大学も名門校で大聖堂の近くに位置し、１５５９年にイエズス会が建てた神学校が前身である。回廊に面して教室が並んでおり、壁のアズレージョを見ると、どんな学科の教室かわかるように成っている。国内各地から集まり多くの学生が学ぶようになったので、エヴォラもまた学問の町と言われるようになった。

ホテルに帰りシャワーを浴びて会食会場に向かった。オリンピックが気になるらしくテレビを夢中である。ポルトガル語で天ぷらは tempero （調味料・味付けるの意）で、衣に味付けてあった。そしてカステラについても聞いた。

カステラの語源は、中国の生地「絹＝ろ」という意味もあり、「ふわふわして柔らかい絹のようなボーロ」と言う説。

ポルトガル人がパン･デ・ロの作り方を日本人に教えた時に、卵白を十分に泡立て、「お城（castelo）のように高く角が立つくらいに卵白を十分に泡立てて」とのアドバイスの「カステロ」がいつの間にか「カステラ」に成ったと言う説。

カスティリャ王国のお菓子がポルトガルに渡り、パォン・デ・カステラとポルトガルで呼ばれていたものが、日本に渡った。その間に、ポルトガルではパォン・デ・カステラの原型をポルトガル式に工夫し、名前もパォン･デ･ロとなった。と、準備してあるように詳細に説明を受けた。会食後は南欧の湿度の低いそよ風をほろ酔い加減の頬に受けて、全身を南欧の風に吹かれてホテルまで歩いて帰りました。

パォン･デ･ロ

サムライの回転寿司

城壁の門

ロータリー交差点

整列した商品群

白鳥の間

次の朝、部屋をよく見ると、リンゴとワインとオリーブオイルが、お土産として置いてあった。カメラを持ってホテルの廻りを散歩すると、路地の裏に「SAMURAI」と言う名の寿司屋があった。ブッフェスタイルで食べることができ、鉄板焼きもあり、価格の中心は１０～１１ユーロくらいで持ち帰りも出来るようだ。昨夜知っていたら寄ったと思う。路地を抜けて歩いていると若い女性がテラスのテーブルを除菌している姿が目についた。城壁の門をくぐって外に出ると、ひっきりなしに自動車が通過していく。このロータリー交差点は、中心の島の周囲を一方向に周回する方式のもので、信号はないが渋滞がないように感じる。直交する交通が無く、またある程度通行速度を落とす必要があるため、事故率が低くなる。信号が無いため、錯綜する交通がなければ一時停止する必要が無い。また、信号の維持費がかからない。環状路を一周することで U ターンが容易にできる。などの利点がある。

リスボンの方向に向かうと、広大な草原に馬、牛、羊を放牧している。サービスエリアの売店では、飲食コーナーとコンビニを１人の女性が、がんばっていた。アイスが綺麗に並べられている。日本でも種類や量が少ないときのレイアウト方法であり、寄る店、商品量が少ないように感じている。アウトレットに行くバスと隣り合わせになった。デパートやショッピングセンターやアウトレットが出来たばかりらしいです。

シントラが近くにつれて松林が多くなり、松ヤニを採取している。樹齢１５年ぐらいの物で胸高直径１６㎝以上のものから採取し、１本の木から年間約２ Kg の松やにが取れますが、この中から松ヤニ（ロジン）として約７０％、テレビンとして約１５％が取れる。１本から松ヤニを採取する期間は、大体３年～９年間で、その種類は海岸松である。人件費が安くないとこのようなことは出来ない。シントラに入ると住宅やアパートも全て煙突が付いている。

■シントラ王宮

シントラ王宮を訪問した。専門ガイドのエレナさんが担当する。穏やかな景観は山頂のペナ城とともに「シントラの文化的景観」として 1995 年、世界文化遺産に登録されました。長崎県大村市とは姉妹都市をしています。シントラが王族たちの避暑地となったのは、13 世紀のディニス王の時代でイスラム教徒のムーア人が残した建物が王宮に改造されたのがきっかけでした。18 世紀ごろには貴族や金持ちが競って別荘を建てました。町の主な見どころとしては、シントラ王宮や緑の中に瀟洒な別荘が建つ風景、ムーアの泉、市庁舎、９世紀ごろのムーア人の城塞跡があります。王宮の正式名は「パラシオ･ナショナル･デ･シントラ」です。1584 年 8 月、ポルトガルに上陸していた天正遣欧使節の一行がシントラの王宮を訪れ白鳥の間で、1585 年 10 月、伊東マンショ、千々石ミゲルらの天正遣欧使節一行はアルベルト･デ･アウストリア公爵に謁見しました。天井に 27 羽の白鳥が描かれています。17 世紀の作で、どの白鳥もポーズは違い、首に王冠を飾っています。王が嫁ぐ姫を思って描かせ、礼拝堂には 14 世紀の天井装飾がそのまま残り、床に精緻なアズレージョが敷き詰められていました。台所には大きな釜が並んでいます。王宮前には観光客目当ての土産物店が並んでいたので、壁掛用のコルク製品を買った。他に陶器や布の工芸品のほか、シントラ名物のチーズ入り菓子、ケイジャータも並んでいました。昼食にポル

シントラ王宮

シントラ王宮の正面

タコのリゾット

プレゼント

ジェロニモス修道院

トガル産の米と蛸とエビの定番郷土料理のタコのリゾットがでた。癖があるがタコはやわらくて大人も２杯、３杯食べている子もいました。タマネギを入れ、水を少なめで茹でるらしい。豚足の煮込みもでた。最後にでたお菓子は、京都の八つ橋にはいっているハッカの味が強かった。タコの茹で方で異常にもりあがり、島原半島の「島原半島はしり蛸」も話題にのぼった。父に聞いたら「穴ダコ」のことで、よく取りに行っていた。細く長くて足の先を切って食べなさいと言われており、お腹が痛くなると思って今でも幼い記憶で繰り返している。このレストランは、人気があるのか満席だった。バスまで歩いていると同じTシャツを着ているので聞くと、昨日の現地学生との交流会でいただいたという。

次の訪問先に着く時間を利用してガイドの入江さんが話してくれた。ポルトガルは王室の権力強化のために財源を求めていた。海に囲まれたイベリア半島だから海上貿易に目を付けた。当時一番儲かるのが香辛料貿易だった。香辛料は軽くて輸送しやすいうえ高価で取引された。

当時のヨーロッパでは同じ重さの銀と交換されたというから超高級品で、よく売れ香辛料なしではすまない食生活になっていた。ヨーロッパは緯度が高く、寒冷な地域で、もともと農業生産にあまり向いているところではなかった。だから、小麦などの穀物栽培以外に豚や牛などの家畜も多かった。放し飼いして肥えた秋に屠殺します。肉は干し肉、薫製など保存のために加工と多くは塩漬けにして樽の中につけて置きます。この肉を長い冬の間に食べつなぐわけです。いくら冬は寒いと入っても、肉は傷んでくる。やがて腐りかけた肉なども食べることになる。これが臭い。しかし、我慢して食べていたわけで、腐りかけた肉にかければ臭みが消えるコショウの味を知ると、なくてはならないようになってきます。この香辛料は、インド西海岸のマラバール海岸や、ジャワ、スマトラ、マライ半島で作られていた。クローヴ（ちょうじ）、ナツメグはインドネシアのモルッカ諸島周辺でしか栽培されていませんでした。遙か遠いアジアです。インド商人、アラビア商人、そして、イタリア商人と多くの仲買人を経て運ばれますから、ヨーロッパに来たときは驚くほど高くなるのです。ポルトガルはイタリア商人との別のルートでインドに直接到達する方法を探すことにしたのです。直接インドまで行ければ仲介商人なしだから利益は莫大となり、この時期に羅針盤の改良が行われたり、地球球体説もとなえられるようになり、遠洋航海への技術的な裏付けも整ってきました。また日本では、ポルトガル商人による南蛮貿易が盛んになり、並行してエズス会のカトリック布教の布教も盛んになったが、禁止され交易はオランダに変わってしまった。1639年には幕府の鎖国政策でポルトガル船の日本への来航は禁止し、再開されたのはそれから 240 年を待たなければならなかったのです。

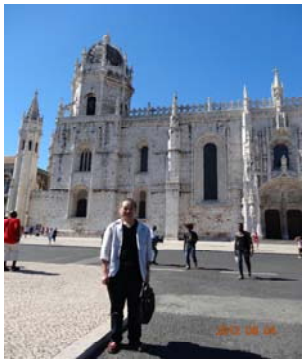
●ベレンの塔(サン・ヴィセンテの砦)世界遺産

川面に佇む白亜の塔は、その優美さから「テージョ川の貴婦人」と讃えられ、作家の故司馬遼太郎さんも著書「街道を行く南蛮の道」で「テージョ川の公女」と表現したほどテージョ川沿いに世界遺産が静かにたたずんでいます。マヌエル１世がテージョ川を行き来する船を監視するための要塞として、1519 年に建てました。塔は高さ 30m の６層からなり、正式にはリスボンの守護聖人にちなんで「サン・ヴィセンテの砦」といいます。テージョ川と大西洋の境目に建つ塔は、上部はポルトガルの城を、下部はカ

ベレンの塔

発見のモニュメント

ジェロニモス修道院



ジェロニモス修道院

ケーブルカー

ラベラ船をモチーフにしたマヌエル様式です。塔は６層のうち４層から上は王族の居室。４層は国王の間、５層は食堂、６層は王族の居室、その上にテラスがあります。３層は兵器庫、２層は砲台です。波が打ち寄せる１層部分は貴婦人や公女の名にはふさわしくない残酷な水牢で、渚に突き出すように出っ張った建物の下部に四角い窓が並んでいます。満潮時にはここから牢の中に水が入って囚人を水攻めで苦しめたそうです。

●発見のモニュメント

エンリケ航海王子の 500 回忌を記念して 1960 年、ヴァスコ･ダ･ガマが船出した場所に設けられました。モニュメントの東西両面に 33 人の像が並んでいます。船首の先頭に立っているのはエンリケ航海王子。３本マストのカラベル船の模型を手にして大西洋を見据えていました。両側に大航海時代を担った天文学者、地理学者、航海者、宣教師などが表されています。西面にはエンリケ王子を含めて 17 人が並んでいます。東面には 16 人。エンリケ王子の後ろには、大航海時代の黄金期を築いたマヌエル１世。次にバスコ･ダ･ガマ、ブラジル発見者のペドロ･アルヴァレス･カブラル、世界を周航したフェルナン･デ･マガリャンイス(マゼラン）ら海洋王国建設に貢献した英雄が並んでいます。宣教師や船員や学者もいます。発見のモニュメント前の広場には、大理石のモザイクで描かれた直径 55m の大きな世界地図があり、世界各地の発見年号が記録されています。日本の発見は 1541 年と表記されていました。1543 年の鉄砲伝来が最初のポルトガル船でとあるが 1541 年にも豊後国（大分県）に漂着した史実に基づいているそうです。

●ジェロニモス修道院（世界遺産）

1502 年、第 14 代ポルトガル王、マヌエル１世の命によって着工して 1551 年に完成しました。石灰岩の建物はその後、増改築が繰り返され、現在の姿になったのは 19 世紀になってからです。いわゆる３００年掛けて建造しており、リスボンで 10 万人が犠牲になった 1755 年の大地震にも耐えて、大航海時代の栄華ぶりをいまに伝えています。南門はマヌエル様式の傑作で 24 人の聖人像、聖職者の像や紋章などの浮き彫りが扉口を囲み、その中央にはエンリケ航海王子の像、天辺には幼いイエス･キリストを抱くマリア聖母像が嵌め込まれています。扉口のアーチ部分にはマヌエル１世の守護聖人、聖ジェロニモスの生涯が描いた彫刻がありました。1584 年に訪れた天正遣欧少年使節の一行も華麗さに驚嘆したと記録されています。修道院はエンリケ航海王子とヴァスコ･ダ･ガマの功績を讃えた顕彰碑ともいわれます。ヴァスコ･ダ･ガマは 1498 年にインド航路を発見し、ポルトガルに貿易発展のチャンスをつくり、ジェロニモス修道院の建設費はガマが得た富でまかなわれています。

●サン･ロケ教会

公園で降りて少し下ると、坂を登ってくるケーブルカーに出会った。さらに下るとサン･ロケ教会がありました。16 世紀に建てられたイタリア･バロック様式の教会で、正面に大きなバラ窓をつけています。ファサードは大地震で破壊し、後年修復されました。教会内にあるサン･ジョアン･バブティスタ礼拝堂は瑠璃（るり）や瑪瑙（めのう）のモザイクで飾られ、市内有数の美しさといわれます。両側にも礼拝室が並んでおり、豪華な装飾が施され、当時の少年達の驚きが感じられるものです。天正遣欧少年使節団が 1584 年に１か月間滞在しています。教会の前はちょっとした広場にな

サン･ロケ教会

サン･ロケ教会内部

ペドロ 4 世広場

ナザレ（プライア）の海岸

ノッサ･セニョーラ･ダ･ナザレ教会

っていて、銅像が建っているので、芸術的なものと思っていたら「宝くじ売り」の銅像らしいです。帰り道に碁盤目の通りの中に灰色の大きな塔が見える。リスボンの市街地が一望できるので、人気がある高さ 32m のサンタ･ジェスタのエレベーターとのこと。帰り道にロシオ広場の横を通り、通称ペドロ 4 世広場の名前が広く知られている。バイシャ・ポンバリーナ地区にあり、かつては民衆の反乱や祝祭、闘牛、公開処刑が行われた場所である。

ホテルに帰り、売店にいった。初日に宿泊したときには知らなかったが、コクル製品など多くのショップがあった。１枚５ユーロのテレフォンカードを２枚買った。すぐにフロントの横の公衆電話で、１枚カード（日本と違いガチッというまで）押し込むと、ポルトガル語でナンバーをどうぞと表示するので、００８１９５７８２００００と自宅の番号を押したら、母が出た。まず途中で切れるからと言って会話始めた。後からわかるが、この５ユーロのカード１枚で、日本に何度も掛けても会話は切れなかった。

リスボンに着き、初日このホテルに宿泊し、次の日エヴォラに泊まり、このホテルは２泊目となる。早めに起きてカードで日本に電話を入れる。毎朝似たような朝食を済ませ、高速中心で２時間半、ナザレに向かってひた走る。ナザレ（プライア）の海岸にはいる前に、夏だけ開催される小さな闘牛場があり、海岸に着くとワゴン車に大きな拡声器をつけた宣伝カーが巡回していた。少年使節は、海の旅の無事を祈って帰国前に立ち寄っています。この海岸を見て加津佐の海岸をおもいおこしたことでしょう。専門ガイドが乗り込んできた。ネウザさんだ。

まず、ノッサ･セニョーラ･ダ･ナザレ教会にはいり、聖母マリアの奇跡で知られるメモリア礼拝堂がある。４世紀、ロマノという僧がイスラエル北部のガリラヤ地方にあるナザレから聖母マリアの像を持参した伝説奇跡によります。聖母マリアの奇跡は１１８２年のある霧の朝の出来事で、愛馬を駆って狩りをしていた城主が岬の先端まで獲物の鹿を追いかけました。勢い余った馬が崖から落ちそうになったとき、聖母マリアが現れて助けてくれたという話です。僧は死ぬ前に聖母マリア像を崖の洞窟に隠しましたが、約４５０年後に羊飼いによって発見され、聖母出現の奇跡話が広がって巡礼者が詰めかけるように成っている。教会を出て右手に行くと広場と展望台になっており、老夫婦で出店している手作り民芸品店が並んでおり、一番高齢らしく夫婦の店でコルクの壁飾りを購入しました。

小聖堂の裏の展望台からはプライヤの海浜風景が一望でき、打ち寄せるささ波、貸出ミニテント（１週間単位で借りる）が林立する砂浜、道路を挟んで連なるレンガ屋根の建物、その間の空き地には民芸品や土産物が所狭しと並べられている。浜辺には、鰺の開きを辺り一面に干してある。斜面に沿ってケーブルカー行き来しており観光客の利用も多いと言います。レストランや土産店が軒を連ねる海岸通りやソウザ･オリベイラ広場がレジャーの中心です。海に面し海岸を一望できる白亜のレストランで、ナザレ名物の塩茹でのじゃが芋付き鰯の塩焼き（Sardinas　Assadas サルデニア･アサーダ）３匹と巨大なジャガイモ３個を食しました。思ったより美味しかったです。大根おろしならさらに美味しかったと思います。地元及び観光客に人気がある料理だそうです。教会の横にもナツメ椰子の木が植えられており、大航海時代の長船旅で航海士たちがビタミン不足を補う貴重な果

ナザレ海岸のテント

鰯の塩焼き

ナツメ椰子の木

商店街

金平糖

涙の館

実であったと聞きました。使節が見たのは、農民の男は黒っぽい合羽、女は十枚重ねの服を身に着けていたとある。漁村の女性は７枚来ていて、夫の船が７日目に帰ってくるので、１枚ずつ脱いで待ったという。また、７日目ごとに教会に行くので、１枚ずつ着たとの逸話があるそうです。大昔の美女も、なんと膝が見えるミニスカート、頭には毛糸のストール、つっかけを履いて、黒づくめは夫を亡くした婦人らしいです。先に訪れたインカ時代の首都クスコの夕暮れに家路を急ぐ農婦に出会いましたが、その衣装に似ています。また、ポルト（港）とカレ（関所）がポルトガルになったなど、いろいろな話を聞きました。

偏西風が吹き、昔は風車小屋で小麦粉をつき、現在、風力で夏は２割、冬は２．５割を補っており、のこりは石炭の火力、不足するとお隣さんのフランスから分けてもらっているそうです。

次の訪問地のコインブラに向かう。道路の真横の空き地で、あちこちで宴会している。日本なら木々の茂る裏の閑静な場所で行いますが、ポルトガル人は、お酒を好きな人が多く、人に見てもらい注目されたい国民性だそうです。バスはさらに走り。辺りは、松林、ユーカリの木が多い、苗木が安くて成長が早いそうです。パレット、セルロース、松ヤニ、風邪薬にしている。だが両方とも油分が多いので、燃えやすく自然発火するそうで、毎日何処かで火事になっているが、ほったらかしのような話でした。コインブラに入る前に新しいガイドのウォルタールさんが乗り込んできた。

最初に大学の膝元の商店街を歩きました。まず目に付いたのが、金平糖（コンフェイト）がウインドケースに並んでいる。小粒で青や赤色で、味は、ほのかに甘く、甘いだけの砂糖菓子ではないようだ。少しありますので、食味できますので商工会に来て味わってください。さらに歩くと市役所があり、少し引き返して、大学に入る門のところのお店で本を購入した。次に、涙の館を訪問した。あこうの木に似た大木があり、その横に竹林があった。その竹の１本１本に名前が刻まれており名前が大きく育っていた。

コインブラは、１１３９年から１２５５年までポルトガル王国の首都で、イタリアのボローニャ大学（１０８８年)、フランスのソルボンヌ大学（１２５３年)、ここのコインブラ大学(１２９０年)と続き、３番目に古い学問の町です。人口は約１５万人、そのうち２万２千人が学生です。リスボン大学ができるまで、名門校として国内の学術、文化を担ってきました。

使節の一行は、大学付属のイエズス会の学校に泊まって、お世話になっています。入り口で黒いマントの学生が案内していました。創始者のディニス王の像を眺め、鉄製の無情の門を潜りました。無情の門とは、学生たるもの門を入ったら学問以外のことを考えてはならないとの教えから、そのように呼ばれるようになったといわれています。旧大学の一部は現在も法学部の校舎として使用され広場の中央にジョアン３世の像が建っています。庭の周囲にはラテン回廊、図書館、礼拝堂など１５世紀から１６世紀の建物が並んでおり、門を入ってすぐの左側にあるのがラテン回廊。２０世紀までラテン語で講義が行われていたので、学生たちはラテン語で話すように義務づけられていたといいます。建物の中は、国賓が訪れたときにも使われたので、真っ赤な絨毯を敷き詰めた部屋には、権威の象徴である歴代ポルトガル国王の肖像画が飾られていました。新郎新婦のどちらかがコインブラ大学を卒業していれば、ここで結婚式を挙げられると、後で聞

コインブラ大学

マントを着た学生

図書館

図書館の内部

旧カテドラル

きました。また、２階のテラスからはモンデゴ川とコインブラの町並みが一望でき、足下が不安定で怖かったですが、写真におさめました。

図書館（１７２４年）は必見です。ジョアン５世（在位１７０６から１７５０）が建てたので「ジョアン５世の図書館」と呼ばれています。蔵書３０万冊を誇り、遠近法の錯覚を利用した天井、華麗な装飾や金箔が施された調度品などに圧倒されジョアン５世の肖像画が飾られており、ポルトガル最高の文化財です。大学内で写真撮影が出来ない場所があるので、入口からずっとマントを着た学生風の男が日本語の案内書を持ってついてくる。DVD も付いていたので購入した。

次に旧カテドラルに行く。聖母マリア昇天の木像を祀り、祭壇の右側には１６世紀のキリスト像と福音書を製作した４人の像、１０人の使徒の像があります。バロック様式のファサードを持つ新カテドラルも１５９８年に建立され、完成までには１００年の歳月をかけています。祭壇背後の飾り壁は１７世紀の彫刻家、ジェロニモ作の金泥塗りの木彫（ターリャ･ドゥラーダ）です。係の方が鹿児島のベルナルドという日本人が眠って場所に案内していただき、説明を受けた。ザビエルから洗礼を受けた初めての日本人でローマ教皇に謁見した人物であった。日本からの長旅で体調を崩し 1557 年に亡くなったと伝えられています。歩いたら踏んでしまうようで段差がないので、後退りして遠くにて説明を受けて、帰り際にそっと撮影しました。

ホテルに向かうバスの中で、入江さんがポルトガルの代表料理を説明。バカリャウと呼ばれる塩漬けにした干鱈（ひだら）の料理は、国民食として毎日のように食卓に登場。調理法は３６５種もあり１日に１回食べても１年中違う料理が食べられるとのこと。代表的な料理はバカリャウ･アブラス、バカリャウ･コジード、コロッケ･デ･バカリャウ、グラタンなどがあります。ノルウェーやアイルランドあたりからの輸入もの。乾物ですが、柔らかさが残るふっくらした感じです。

干鱈は遠洋に船出する航海士たちには欠かせない保存食でした。

コインブラのホテルよりレストランに向かう。毎日、夕食前に少年少女８名が交替で本日の訪問視察先などで経験したことや感想意見を言うように成っています。ポルトガルやローマでも同じだったですが、町のレストランやホテルのレストランでも最初から最後まで背の低いおじさんばかりが料理を運んできました。

次の朝は、今朝は早めに起きて窓から見ると、レンガ色の統一した屋根が見える。丘の上にコインブラ旧大学が建っている。ホテルを左に出て歩いていると、バス停が行儀良く並んでいるので、バスの発着場でもあるのか、各停留所に通勤者らしき人たちが待っている。並木道を進んでゆくと、電話ボックスがあったので、日本に電話した。

朝食後、リスボン空港に向かう。今日はイタリアへの移動日である。バスで３時間ほどかかるため、時間がないので、バスの中ではホテルのボックスランチが配られた。水と乾燥したパンと青リンゴが入っていた。今日は８月６日（月）で、カメラマンの門畑さんの誕生日だったので、バスの中で全員で御祝い励ましの歌を大合唱しました。「親なのに子のとり」、「皇帝が何か買うて～と言っている。」、「煉瓦色の屋根ばかりで、ヤ～ネ」とか言い続けていると子供達より「寒い」言われつづけました。

新カテドラル

ベルナルド氏が眠っている場所

パイプオルガン

移動中のバスの中

空港内

入江さんと

空港まで時間があるので、入江さんは身の上話を始めた。夫は日本人で同業者。ガスが５０日止められたこともある。８月は裁判所も働かない。断水も年に３回ほどある。インコを飼っているが元気がないので、近くの獣医に診せたらオスなのにメスと言うので、リスボン大学に行ったら、太りすぎと言われた。６５歳で年金は２００ユーロくらいもらう、基本医療費は無料とか聞いた。日本に帰ったときには、歯ブラシ、サロンパス、胃薬、ふとんカバー、シーツ、さいばし、冷水パックなどを買ってくるそうです。やはり馴染んだものがいいそうで、日本製が細やかな所に配慮した商品が多いと言われます。

空港でガイドの入江さんとのお別れなので、写真を撮った。ワインとオリーブオイルが入った手提げ袋とオンブズマンとは何ですかと聞かれていたので、解説研究書も渡した。別れ際に、このテレフォンカードは、まだ使えますがと言ったら、入江さんは、公衆電話は、特に割引時間帯があり、極端に安い場合があると聞いています。問題ないので、この空港での使用が最後ですから利用してから乗ったらどうですかとアドバイスを受けた。青い服の係員が誘導案内して手続きにはいる。言われたとおり日本に電話したが、１枚だけも使いきれなかった。

またイタリアで使用するため、１万円をユーロに交換した。歩いてゆくと各ベンチで硬いパンを食べてる人が見える。藤原市長よりぎり寿司をもらって食べたら美味しかった。

ポルトガル航空８４２便は、１５時１０分に遅れてローマに向けて飛び立った。機内でも、サンドイッチとパインとジュースが出た。席はばらばらで、ひとりで座っている女の子の横がサングラスの怖い顔の人だったので、市長が「替わろうか」と言ったら、「いいです」と答えたので、市長は、「噛みはさっさんだろうから」と、言われたがその子に通じただろうか。２８列は一番うしろでトイレがあるのでシートも倒れない。

市長は、搭乗するやいなや歴史書を開き、マーカー片手に到着するまでひたすら熟読されており声も掛けられなかった。１冊読破されたようだ。これから行うローマ法王への謁見やキエーティ訪問時の挨拶内容に対しての裏付ける史実の確認ではと、ひとり勝手に思った。１７時４５分にレオナルド・ダ・ヴィンチ国際空港に着き、荷物を取ってホテルに向かう。スーツケースが、何個かが何処かを散歩していたが、夜遅く帰ってきた。寝る前に時計を１時間進めることにした。明日は、バチカン市国である。

少年使節はポルトガルからスペインへ、そしてイタリアにはいり、各地で大歓迎を受けている。だが、栄光と楽しみと同時に、長い船旅、風土病など辛い面も並行して付いて回っており、それらの葛藤にも多くの時間を費やしている。

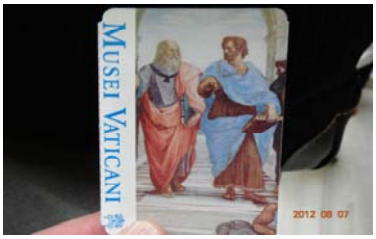
初めてのローマの朝なので、カメラを持って散歩に出た。２分くらいでカブール広場についた。カミッロ・カヴールは、卓越した外交術を駆使してイタリア統一を成し遂げた功績から後世「神がイタリア統一のため地上に使わした男」の呼び名が付き、イタリアの各地に広場や橋などに命名されている。目の前に旧最高裁判所などがある。横のカブール橋を渡たり東に行くとスペイン広場がある。広場から西に１ km 程行くとヴァチカン市国で、広場から南に行くとトレビの泉があり徒歩で訪問できる範囲だ。

朝食を済ませバスに乗り待っていると、２名がなかなか来ない。寝坊のよ

ローマ市内

カブール広場

城壁



チケット

３種の説明画

松ぼっくり

うで、少し遅れてバスは出発した。城壁が時折見える。ローマを取り囲んでいた城壁は、崩れているところも、いまは生活の中に生きています。厚さが６ｍで高さが１２ｍもあり、今残っている城壁のほとんどが紀元前２７１年、アウレリウス帝時代のものらしいです。

ヴァチカン市国に入国。ヴァチカンという名称は、「ウァティカヌスの丘」からとられ、聖ペトロが殉教したという伝承で当地が中心に成っている。チケット片手にイヤホンガイドを装着する。長時間なので入り口の自動販売機でミネラル水を１ユーロで購入し、トイレに行ったが、小便器の位置がが高くて、つま先だって用を足した。まずセキュリティチェックを済ませ、混雑するエントランスから長いエスカレータを昇って最初に「ピーニャの中庭」にはいると、建物沿いに何カ所も３種の説明画があり、左がミケランジェロ祭壇画、中央がシスティーナ礼拝堂と新旧約聖書の壁画、右がミケランジェロの天井画である。礼拝堂の中は撮影禁止なので、ここで事前に説明を済ませるが、説明が非常に長い。４３度の炎天下である。ピーニャとは松ぼっくりのことである。古代ローマ帝国時代は、噴水だったそうで、旧サン・ピエトロ大聖堂の前庭に置かれていたが、現在の大聖堂が建設されたのでピーニャの中庭に移された。中央の球体は、アルナルド・ポモドーロの「球のある球体」である。１９９０年にヴァチカンのために作られ、直径４ｍの大きさである。松ぼっくりの前で全体写真を撮り、ようやく進むこととなる。

ヴァチカン美術館と言うが、いくつも名称が付いて別れている。あまりにの多さに説明が前後したり間違っているかもしれませんので、ご了承下さい。カメラは、７千枚から１万枚（１枚２Ｍ～５Ｍ)、動画は、７０分を一台で交互に取れる最新カメラを準備して望んだ。

ヴァチカン宮殿の北側にある美術館、図書館など２０を越える施設の総称で、ヴァチカン宮殿、システィーナ礼拝堂を含めてヴァチカン美術館と呼ぶときもある。

まずピオ・クレメンティーノ美術館にはいる。八角形の中庭（ベルヴェデーレの中庭）の真ん中に里芋が植えてあった。ご存じの「ラオコーン像」、１５０６年ローマのエスクィリーノ丘で発見されている。トロイア戦争のおり、トロイの司祭ラオコーンが城内に木馬を入れないように主張したため神罰を受け、その場で子供たちとともに２匹のヘビに絞め殺されたという伝説の場面。「ベルヴェデーレのアポロ」と「ヘルメス」の彫像は共に２世紀頃のローマ帝国時代の作品である。次のミューズの間を代表する彫像は、「ベルヴェデーレのトルソ」で、イタリア語で「幹」の意味で頭や手足の無い裸身（胴体）の彫像のことをトルソと言うらしい。次の円形の間には、円形の間の床を飾るのはギリシャ時代のモザイクと、部屋を取り囲むように彫刻が並べられ、部屋の真ん中には、直径１３メートルもある一枚岩の斑岩で出来た水盤がある。天井は直径２２ｍのクーポラ（ドーム）でパンテオン（神殿）を模している。次にギリシア十字の間を抜けて二階に行くと大燭台のギャラリーがある。細い通路に天井壁絵が続き、ライトアップされている。次にタペストリーのギャラリー。織物絵で一場面ごとに精細に表現されている。さらに地図のギャラリーへと進んでゆく。イタリア各地を描いた地図が回廊の両側に４０枚あります。そして聖ピウス５世の部屋、ソビエスキ王の間、 無原罪（インマコラータ）のマリアの間へと

ピーニャの中庭

ラオコーン像

ベルヴェデーレのトルソ

円形の間

ギリシア十字の間

大燭台のギャラリー

歩いて行きます。後を付いてきてください。写真を撮るだけで精一杯なので、遅れないようにお願いします。

目玉展示は、ラファエロに、教皇ユリウス２世が、自らの居室にフレスコ画を描かせています。ラファエッロの間は「ボルゴの火災の間」「署名の間」「ヘリオドロスの間」「コンスタンティヌスの間」から成ります。

コンスタンティヌスの間は、コンスタンティヌス帝が十字架の夢を見て、夢のお告げ通りに戦ったら勝利したので、改宗した話です。次のヘリオドロスの間は、教皇レオ１世とアッティラの会見風景である。「署名の間」これは教皇が公式署名した部屋で、特にアテネの学堂が有名です。火災の間には、教皇レオ４世が十字を切ったらボルト地区の火事が鎮火した話です。

次はシスティーナ礼拝堂にはいります。警備が厳しく撮影は出来ないので、みんな立ち止まって天井を見上げてたままで、流れは止まってしまっている。礼拝堂は、シクストゥス４世の命により教皇礼拝堂として１４７５年に建設が始まり１４８１年に建物が完成している。ミケランジェロが４年の歳月をかけて描いた大天井画の『創世記』、６年かけた『最後の審判』の壁画があります。両側の壁際に椅子があるので、空いたら座って、じーっと上を見ていました。教皇を選出するコンクラーヴェの会場としても知られています。螺旋状階段をおりました。

最後になりましたが、サン・ピエトロ大聖堂にはいる。総面積は、約２万２千㎡で、６万人以上収容可能といわれている。ミケランジェロの設計したといわれる大円蓋（クーポラ）は高さ１３２．５m、直径４２mと巨大。大円蓋の直下には、ベピエタ聖堂内には、十字架から降ろされたキリストを抱く聖母の像を表現したミケランジェロの代表作『ピエタ』がおかれている。ミケランジェロは、ピエタ像を 4 体制作しているが、サン・ピエトロ大聖堂にあるピエタは、２５歳の時の最初の作品であるがいちばん有名である。

出口に警護に当たるミケランジェロがデザインした華麗な服装のスイス人衛兵が２名立っている。市国警備員（スイス人衛兵）がいるものの、警備はイタリア国家警察が行っている。独自の放送局、銀行、郵便局、鋳貨施設、イタリア鉄道と連絡する鉄道などがある。本当かどうか、外国郵便ならヴァチカン内のポストに投函すると早く着くらしい、サン・ピエトロ広場に出ると、２８４本のドーリア式円柱で装飾された回廊により広場を取り囲むように構成されている。回廊の上には、ベルニーニの弟子らが作成した１４０体の聖人の像が飾られている。広場中央のオベリスクは 1 世紀頃にエジプトから運ばれて、バチカヌスの丘にあった競技場におかれていたものである。その広場で記念写真を撮った。

歩いてイタリアにはいり、少し行くとお店があったので、トイレを兼ね１０分ほどもらい日本語の写真付き説明書を購入した。観光ではないので、訪問先から訪問先までの間は、トイレ休憩と昼食時間しか休めない。

昼食は閑静でガーデンが広いレストランでの昼食であるが、ここも背が低いおじさんが給仕する。イタリアから国際交流員として南島原市に１年居たアンナさんが本日より通訳を兼ねて同行する。ここのレストランにも３名のおじさんがいるが、アンナさんにちょくちょく余分な会話をしに来るおじさんは、私より若いようであるが、頭はピカピカに輝いていました。

コロシアムの周りをバスは走り、真実の口がある教会前の真実の口広場

タペストリー（織物絵）

サン・ピエトロ大聖堂

サン・ピエトロ大聖堂

ピエタ

大聖堂にて

サン・ピエトロ広場

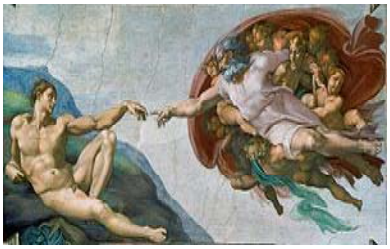
和解の道

に大勢のカップルや年配の方々の長い行列が見えた。次の訪問地に行く通りに「トレビの泉」があるので、立ち寄った。１個投げるとまたローマに戻れる、 ２個投げると好きな人と結婚できる、３個投げると嫌いな人と別れられるというものです。私も日本円の５円（ご縁）を泉に背を向けて投げました。投げた５円の数は秘密ですが、子供達がまだ投げているんですかと言いました。トイレのため近くの店でアイス頼んで地下のトイレに向かった。

サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂に着いた。ローマの四大バシリカ（古代ローマ様式の大聖堂）のひとつに数えられ、ラテラノ宮殿が隣接している。四大バシリカとはこのラテラノ大聖堂とサン・ピエトロ大聖堂、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂、サン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ大聖堂である。ラテラノ条約は、１９２９年２月１１日にローマ教皇庁がムッソリーニ政権下のイタリア王国と締結した政教条約で、調印がローマ市内のサン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂に隣接したラテラノ宮殿で行われた。ラテラノ大聖堂前の広場にはエジプトから運ばれたオベリスクが屹立している。このオベリスクはもともとトトメス 3 世によってハルナックに建てられたものだったが、ローマ時代に大競技場チルコ・マッシモに建てるために運ばれ、その後、競技場がなくなると、現在地に移された。また、こんな話も聞いた。かつてはバチカンを取り囲むように古い住宅がごみごみと立ち並んでいたが、イタリアの実権を握ったベニート・ムッソリーニはラテラノ条約によるカトリック教会との和解を世界にアピールしようと、サン・ピエトロ大聖堂正面の家屋を大胆に撤去し、広い街路を敷いた。これが「和解の道」といわれるバチカン市国前のメイン・ストリートである。

そのほかに、教皇庁とイタリアの間に締結されたラテラノ協定に従って、サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂、カステル・ガンドルフォ教皇庁宮殿など、ローマ市内外の施設にも主権（治外法権を有する）がある。また、グレゴリオ１３世の後を継ぎ即位したシクスト五世は、サンピエトロで戴冠式に彼らを招くとともにラテラノ教会の行幸にも彼らを参列させたのでした。この図の中に４人の少年が洋服姿で馬にまたがる毅然とした姿を見出します。ヴァチカンのシクスト五世の間の入口の右上の壁に残されている「ラテラノ教会行幸図」がこれです。

次にジェス教会に行く。ローマに着いたのは１５８５年３月２２日で、それからローマ少年使節が離れる６月３日まで、少年使節一行が宿舎にしたのが、ジェズ教会であり、イエズス会本部でもあった。前年に建てられたばかりであった。「長崎殉教図」と天井画の説明を受けた。アジア大陸を踏破してローマにたどり着いたペトロ岐部も祈りの場としていたと聞きました。明日は、いよいよローマ教皇（法王）への謁見でローマ法王庁の避暑地に向かう。長崎から法王庁に派遣されている和田神父が明日の打ち合わせでホテルに来られている。当時の４少年と同じように裃（かみしも）で謁見することに成っており、今夜は夜遅くまで幼い少年少女たちは、ひとりで着て、また脱いで、着たら草履で歩く練習が各部屋で繰り返されることであろう。ローマはまだ眠りについていない。

コロシアム	ラテラノ大聖堂	ラテラノ大聖堂の内部
ジェズ教会	ジェズ教会の内部	ジェズ教会の天井画
馬上の少年使節たち	長崎殉教図	地図の間
ソビエスキ王の間	無原罪	コンスタンティヌスの間十字の出現
ヘリオドロスの間	署名の間・アテネの学堂	火災の間
		
創世記	最後の審判	ヴァチカン内

ローマ教皇（法王）

ローマ教皇（法王）

謁見（藤原市長）

謁見（藤原市長）

謁見後の市内代表と

謁見後の記念写真

カステル・ガンドルフォ(Castel　Gandolfo)に向かう。ローマから約２５キロ南下したところにあり、人口８，５００人のイタリア共和国ラツィオ州ローマ県のコムーネ（自治体）のひとつである。バスの中で結城氏の著書「ローマを見た」を読むと、１５８５年３月２３日にグレゴリオ１３世に謁見。発熱した中浦ジュリアンは医師に止められたが「パパさまにお目通りかなえば死んでも本望です。」と参加する。教皇はジュリアンを抱擁し、病気を治すことに専念するように忠告した。他の３人は袴をまとい、馬にまたがってヴァチカンへ向かう。先頭には騎兵隊、スイスの衛兵、枢機卿、ローマ駐在各国大使、真赤な服装の教皇庁職員、２人の大司教に挟まれてヴァチカンに向かう。教皇は３人を涙ながら迎えた。３人は土下座して十字を切り、教皇の足に接吻した。４月２４日には、次の教皇に選ばれたシクスト５世に謁見しており、２代の教皇に謁見している。５月１日の戴冠式に参列するために馬に乗った４少年の壁画が、前にも触れましたがヴァチカンにあります。２代といえば、今回の団長である藤原市長もヨハネパウロ２世とベネディクト１６世に謁見している。有家町長時代を加え２代のローマ教皇（法王）に謁見されるとは、強運の持ち主であり、珍しいと言えます。その市長は、バスの中でアンナさんよりイタリア語の発音のお勉強中です。「もう少しまろやかに」と、何度も何度もバスの中には市長の爽やかな発音が流れていました。

専用駐車場から歩いて行くと、子供達の裃（かみしも）は目立ち、各国の人たちもいろいろと聞いてくる。坂道を上ってゆくと、左にアルバーノ湖が見える。周囲１０ｋｍで水深は１７０ｍもあるカルデラ湖である。広場の入り口で、法王庁の警備員がバックの中をチェックする。広場のまん中には噴水がある。ここは昔から教皇が避暑地として訪れている。７月から８月の間は毎年教皇が約１ヶ月ほど滞在される別荘で、城内にはチーボ荘、バルベリーニ荘とともに、５５ヘクタールに広がる別荘や農園があります。ここの作物は毎朝、教皇宮殿に野菜・果物・牛乳・鶏肉等の食材が届けられ、教皇をはじめとした教皇庁職員に供されます。余剰品の牛乳などは、ヴァチカン内のマーケットや近隣の商店で取り扱うとのことです。近くに ２１２～２１７年にかけて建立された巨大浴場（カラカラ浴場）があり、敷地内には図書館や散歩道、アスレチック施設などがあり、当時は社交場としてにぎわっていたらしいです。

ローマ教皇の謁見が行われる中庭にむかう。教皇を直に会うことが出来る人数は限られている。入れなかった人は宮殿の正面のモニターで謁見の様子を見守ることになる。１０時半のからの謁見ですが、中庭への入場が始まったのが９時半ごろで、中庭に入るため再びバックを開けて荷物検査を受けた。ペットボトルのフタを渡すのは水の入ったボトルを教皇に投げつけるのを防ぐためだそうです。門にはに警護に当たるミケランジェロがデザインした華麗な服装のスイス人衛兵がここにも立っています。

ゆっくり進んでゆくと、中庭にもモニターがあり、教皇の様子をアップで見ることができるようになっている。間近に法王の椅子が置いてあり、教皇の前にはやっとひとりが立てる範囲しかない。隣の若い金髪の女性がカメラの調子が悪いのか、カメラを見せて「日本人か」、また「カメラが直せないか」と聞くので、ソニーだったので日本人なら直せると思ったのだろうか。日本人と聞かれて安堵した。これは海外はひとりでが多いので、日本

副市長疲れました

ガンドルフォ城の前広場

裃姿の８少年たち

アルバーノ湖

各国の参列者と

先導する市警察の白バイ

人以外の国名で聞かれる。礼服だと日本人かと聞かれるので、人間外見も必要だなと思います。

しばらくして聖職者の方が来て謁見に参加する団体の名前を読み上げました。イタリア語、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語と言語が変わる度に読み上げる係の人も変わります。我々は英語のくくりになっており、「ミナミシマバラ　ジャパン」の紹介があると大きな歓声があがりました。次に教皇が登場され、「司祭、説教者兄弟会（ドミニコ会）創立者のグスマンの聖ドミニクスの祈りの生活について」イタリア語で話されました。（２０１２年８月８日、カステル・ガンドルフィ公邸前のピアッツァ・デッラ・リベルタ(自由広場)にて)。その後、教皇はフランス語、英語、ドイツ語、スペイン語で話されました。いちばん前列には結婚式を挙げてきたばかりの二人が寄り添って立っています。

最後に、教皇と直接に言葉を交わす機会が設けられ、使節団を代表して藤原団長が壇上にあがって､勉強された流暢なイタリア語でなく英語で､「日本の長崎県から来ました。」と語りかけると、法王は笑顔で応えられたと、その場の模様をはっきり言われました。謁見後に島原手延そうめんも献上され、市長が宮殿の方に歩いて行くので、係員が素早く市長の腕を優しく持って出口まで誘導されているのをビデオに収めました。島原手延そうめんの返礼かどうか不明ですが､特別謁見記念品をいただいてこられました。大変貴重なものです。

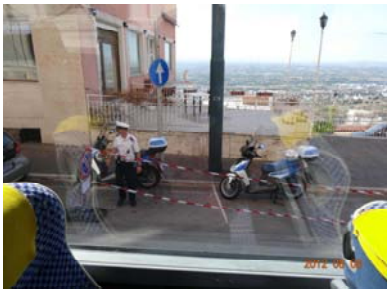
謁見後に、共同通信社ローマ支局のダヴィデ・コメット氏は、感想を取材している。森永由衣さん（１４）は「法王に会えたのがこの旅の一番の貴重な経験で一生の思い出になります。」と感激した様子で、また横浜市の森田洋史君（１５）は「法王の包み込むような優しさにや雰囲気に圧倒され、人生の良き思い出になりました。」と話していた。このような経験は人生に二度とない名誉かも知れません。

日本からの裃姿は、バスを降りるところから謁見後の帰る道すがらまで、各国の人たちの興味を引いた。受け取ったカメラは全部日本製で、何度も私はシャッターを押していました。

キエーティは、ローマより２００ Km で３時間ほどかかる。イタリア共和国アブルッツォ州にある人口約５万５千人の都市で、キエーティ県の県都で、標高４００ｍの所のペスカーラ川右岸、マイエッラ山とグランサッソ山手前の眺めのよいところにあります。イエズス会宣教師・ヴァリニャーノさんの出身地である。ワイン畑に覆われた、なだらかな丘が特徴的なアブルッツォ州のワイン生産のほとんどが、ここキエティで栽培されており、イタリア国内２位のワイン生産高を誇ります。

高速を降りると、市警の白バイが待機して我々を誘導する。ローマ法王に謁見や白バイ誘導など滅多にない体験に、一番興奮しているのは添乗員とガイドだった。こうゆう経験は普段の生活では訪れないだろう。

ホテルに着くと警官がバスの廻りにいる。バスを降りると大勢の人たちがホテルの玄関の周りを囲んで我々に手を振ってくれる。平成の少年たちのホストファミリーと市役所の方々の歓迎である。ホテルに荷物を置き、歩いて市の中心部に向かうと、広場にてフォルテ大司教に迎えられ歓迎を受けた。話の途中でアイスが配られたが､町の至る所でアイスが目に付く。次に礼拝堂に案内されて、お祈りと大司教を囲んでの記念写真を撮り、大



ホテルを警護する市警察

大勢の方の出迎え

フォルテ大司教

大司教と記念写真

歓迎式典

歓迎レセプション

司教と別れて市役所に向かった。

歓迎の式典では、両市長もエヴォラ市と同様の思いがあり、お互いに興味を示し、歴史だけではなく経済的な交流を話された。また、南島原市が９月に行う記念式典への出席も重ねて要請され、両市のプレゼントの交換がなされたあと記念写真を撮った。絆のハッピは評判が良かったが、ポルトガル人とイタリア人なので、少し小さくてチョキ（ベスト）のような感じだった。式典には多くの取材があり、出席者も大勢参加されているのに驚きました。

歓迎レセプションまで時間があるので、ディ・プリミオ市長自ら市長室、市議会場、商工課などを案内していただいた。市内の建物を入ったり出たりしていると、先回りしたように至る所に白髪のおじさんが立っています。

歓迎レセプションは、ローマ時代の遺跡のまん中にテーブルがつくられ、悠久の光の中での食事会である。ホストファミリー、ヴァリニャーノ一族皆様、彫刻家、市の関係者など多くの方にご出席いただきました。少年たちもホストファミリーにすっかり溶け込み、楽しいひとちきを過ごしていました。途中、美人の市長夫人と幼い娘さんが来られ挨拶に回られます。

会食の途中で、ディ・プリミオ市長と藤原市長が仲良く、こっそり歩いていくので、後から着いていくと自衛軍の音楽祭に参加され、手を胸に当て自衛軍の幹部２名とともに観謁式に望んでおられました。しばらく音楽を楽しんだ後、会食会場に戻り、子どもたちを呼び、扇子（イタリア語で詳細に説明した文を添付）とカップめんと岩おこしを、何かの時の話の種にしなさいと言って渡した。次の日、現地の子どもの持っているのを指さして大人の方も日の丸の扇子が欲しいらしく、１本残っていたのを渡した。何人もの方が欲しそうにされていたのが印象的だった。何度海外に出て経験しても何が喜ばれるの検討がつかない。爽やかな夜風を受けて石畳を歩いて行くと、クラシックの音楽会が始まろうとしていました。

音楽会は、キエーティ財団のディ・ニシオ理事長と並び楽しいひとときであった。終わりの方では衣装を変えて、日本人テノール歌手が雪駄を履き甚兵衛姿で熱唱される。右側を見ると、日本人らしい女性が二人鑑賞されていたので挨拶して名刺をいただいた。秋篠音楽堂ディレクターの吉川さんと、イタリア近鉄の花井さんで、皆さんが来られると聞いたので駆けつけたとおしゃいました。その後は、子どもたちは、ホームステイ先に行くので別れた。音楽会の帰りに市長夫妻と一緒になった。遅いので眠りについた幼い子供さんは乳母車の中。「あなた押しなさい」と、奥さんが乳母車を渡された。見ていた私に、にっこりされ、マッルチーノ通りを二人並んで歩いて行かれた。市長は話されるとき、美人の奥さんが自慢なのか、結婚指輪をくるくる回しながら話されるのが印象的でした。

本日宿泊するホテルは、昔の５つ星と思われ、高台にあるので、各部屋より外に出られ、部屋からの景色が最高である。昼間は１階でアイスクリーム中心に販売しており、ピザなどもある。夜はお酒もあるので飲み屋となるのだろう。地下であるが絶壁に立っているので全体が明るい。観葉植物などが多く並べられレストランに成っている。

ホテルに戻りフロントで部屋番号を英語で伝えたが通じない。メモと鉛筆を持ってきて、部屋の番号を書けと言っているようで、再度英語で番号を言ったら、棚から全部のカギを持ってきて並べるので、自分で選べとの

楽団

観謁式

現地の学生との交流

音楽会会場にて

日本人テノール歌手

・ジュスティーノ大聖堂

ことだろう。ひとつを取って部屋に向かう。部屋からの夜景は本当にすばらしかった。

次の朝、ホテルを出て左に出て坂を上ってゆくと、左にかまぼこ型のドームみたいな建物がある。覗くとエスカレーターが上下動いており１台が長く３連あり、下の町と繋いでいる。もう少し歩いてゆくとバスの発着所があり通勤者が待っている。右手に教会があり部屋からも見えていたロマネスク様式のサン・ジュスティーノ大聖堂で、威厳があり鐘が見える。大聖堂をくぐり抜けて歩いてゆくと、古い町並みが裏通りに続いているので、珍しい建物を写真におさめた。ホテルに帰えると地下のレストランで朝の爽やかな風に包まれて皆さんはお食事中でした。

午前中は、市長夫婦と市議会議員の案内でワイン工場を視察します。漫画家のサラさんと環境課の女性職員も同乗した。財団のワイン工場で、娘さんから説明を受けた。国県市からの助成金や補助金は一切なく資本金は１２億円と聞いた。ワインツーの高田副市長の強い推薦なので、赤を１本、バックにいれ帰国した。

バスは市内に戻り、サン・ジュスティーノ大聖堂で子どもたちと落ち合った。その横に昨日の至る所に出没するおじさんが立っていた。そのおじさんは、自ら大聖堂内を案内してくれます。大聖堂の中にも、おじさんが制作した銅像があり、外には４少年を派遣したアレッサンドロ・ヴァリニャーノさんの胸像がある。これらを制作され、多くの勲章をいただいていらしゃるお偉い方とわかって、急遽握手して一緒に胸像の前で写真におさまった。

旧市街まで歩いてゆくと、人口のわりには人通りが多く、オープンテラスが並ぶエレガンスな町並みです。マッルチーノ通りやデル・チェントロ通りには、有名なマッルチーノ劇場、バルベッラ美術館、教会が町並みに溶け込んでいます。ひとつひとつを見て回りました。特に劇場は、真赤の座席が小さいけれどボックス席など大劇場並の設備を備えています。舞台の下には音楽隊がはいり演奏できるように成っています。

ディ・ニシオ理事長は、会食前に我々を呼んで、「南島原市との歴史的なかかわりによって、ヴァリニャーノ神父の胸像が南島原市に行くことを嬉しく思います。そのきっかけはマリッサ・ディ・ルッソ教授によるものですが、これを機会に有効の場を広げてゆきたい」と話されました。それに対し藤原市長は、「交流もない貴市より貴重な神父の胸像をいただき、市民を代表して感謝申し上げます。これからも両市の歴史的繋がりを再認識して、併せて経済的交流も進めて行ければと考えています。来月の９月２２日と２３日に４５０年記念式典を挙行し、ヴァリニャーノ神父の胸像の除幕式を行いますので、是非ご来市くださいますようご案内いたします。」とあった。その後、財団の会館の展示物を案内していただきました。キエーティ財団の前のオープンテラスでの会食には、多くの市民や今まで出会い触れ合った方々が大勢参加され、賑やかに楽しいひとときを過ごしました。

会食後、ホテルまで歩き、ホームステイ先の両親が運んできた旅行バックをバスに積み込む。別れの時間である。我々大人はバスにすんなり乗ったが、８ヶ所で抱き合い、お別れが長く続きました。昨日の昼に出会い次の昼の２４時間だけど、また別れという辛さがありました。子供達同士やホストファミリーも加え、「涙・ナミダ・なみだ」のお別れで、その光景を

マッルチーノ劇場

ディ・ニシオ理事長

「涙・ナミダ・なみだ」お別れ

「涙・ナミダ・なみだ」お別れ

ワイン工場にて

見ていると、こみあげるて来るものがありました。こうまでもしていただけるのかと、市を上げての心温まる歓迎を受け、そして様々な人に出会い、長い歴史が生活の中と町並みに生きた町、「キエーティ」に、ありがとう。感謝したい。

ローマに向けてバスは、４時間あまり走る。今まで泣いていた少年少女は、後ろの座席で全員眠っている。ホテルについて夕食をすませて、後は明日の準備である。今夜は子どもたちをはじめ荷物整理が大変である。書籍やプレゼントなど各自の旅行バックには、はいらない量である。子どもたちは藤原市長からもらったカップめんを整理しながら食べてるらしい。フロントに行こうと歩いて行くと、二人の女の子がエレベータの横でうずくまっている。聞くと、携帯と電子辞書がないという。ホームステイ先よりお母さんにメールしたと言っているので、永友さんまで連れて行った。また、先日のホテルに洗顔セットのお気に入りのケースを忘れたとのことで、子供たちで電話したが言葉が通じなかったので、英語が堪能な高田副市長を捜していると、今度は廊下に残りの二人の女の子がにいたので、この子達も永友さんまで連れて行った。

整理を終えてゆっくりとお風呂にはいっていると、ドアを強くたたくので、何事かと思ってバスタオルを腰に巻きビショビショで出て行くと、８名がドアの前に立っていた。私を見てハダカ・はだかと言って騒いで困ってしまった。近所（隣室？）迷惑である。旅行バックをひっくり返したら、底にはいっていたとのことで安心した。風呂を終えてテーブルを見ると梅干しと塩豆と味噌汁が残っていたので前の部屋を叩いた。部屋中、荷物を広げて二人でじっと眺めて座っていた。食べなさいと梅干しと塩豆と味噌汁を置いて来た。寝ようとしていたら、ドアを叩くので出ると、二人の女の子は梅干しをほおばって、「明日は出発が早いので朝食はないから、今、食べたい」と、さっき渡した味噌汁の袋を手に持っている。１階のバーカウンターに行きお湯を貰うことにした。英語で言うが通じない。わからないのでボーイは同僚を呼んでくるが通じない。二人の女の子も加津佐と大分で「ホットウォーター」とだんだん声が大きくなるが通じなく成って、しだいには「オーユー、オーユー」と言っている。それは日本語ではないか。もう一人は、水差しを触って手を引っ込め、「アチチ、アチチ」として、ようやくお湯とカップを持ってきてくれた。気の毒なのでビールを貰うことにした。二人が食べ終わるまでには、２本飲んでいた。二人の後ろには食べ終わるまで優しく待っていて、「食べたら、朝が早いから早くお休みなさい」との声に振り向いた。事務局の永友さんだった。８名の少年少女をひとりで１１日間お世話されてきている。まだ幼い少年少女で、初めての海外のうえ長期なので、いろんなことがあった。二人が美味しい美味しいと言ってくれたので、嬉しく感じて、ローマ最後の夜はゆっくり眠れると思った。

歓迎式典の出席者

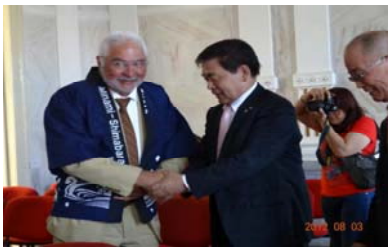
部屋からの風景

市長夫人・市会議員と

お別れ会の会食

別れ

市の中心部の広場

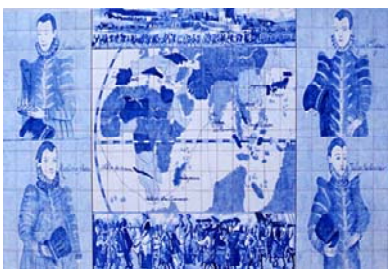


エヴォラにて

四宮全権大使

大使と市長の両夫人

エヴォラ市長と



天正の４少年

ローマを発つ日はホテルを４時半に出て、ローマのレオナルドダヴィンチ空港からパリのシャルルドゴール空港を経由して関西空港に着き、空港の広場で解散式を行ない、東京の二人と別れて長崎空港に飛んだ。

南島原市役所に着くと、みんなが「お疲れ様」の横断幕で迎えてくれました。アンナさんが寝言にように言っていた「カジハラサン」は、横断幕の片方を持っていました。

ポルトガルとイタリアとヴァチカン市国を訪問して、ポルトガルは、財政危機に陥ったのは、長いあいだ経済成長が低すぎたせいだといわれています。景気が低迷して税収が伸びないのに、公務員給与などの歳出はカットされなかったので、財政赤字だけが拡大しています。財政赤字削減を理由に日本の消費税にあたる付加価値税の税率引き上げを強行したポルトガルで、増税が消費を押し下げ、政府の思惑とは逆に税収が減る事態となっています。.ガソリン代は１リットル１．６８０ユーロ。約１６５～１７５円で、日本より少し高いですが、平均所得が月額１１万円です。日本の３分の１くらいです。在留邦人５５０人くらいときいた。日本人にも会わないし、近くの者でポルトガルを行った人をあまり聞かない。一般的に商品の種類や量が豊富ではないように感じました。デパートやショッピングセンターやアウトレットが出来たばかりらしいです。

人口も同じくらいのスウェーデンを訪問したとき、ホテル代とタクシー代が特に高いと思った。消費税は、２５％で、食料品、ホテル代、交通費などは１２％、書籍や新聞などと文化事業に関わる一部商品やサービスに対しては６％となっている。北欧よりホテル代などは安いようである。

先人が驚き感激したであろうこの地を４３０年後の今、辿るとき、ポルトガルと南島原市の各分野ごとの繋がりが出来ないかと日々考えた。先人が受けた恩恵と日本に持ち込まれた文化や食や各種の文明品などが日本にはいり、地域と共に進化して、今の日本の繁栄の礎と成っていると思います。何をこれから出来るかを模索することより始め、自我を超えた視点で歴史を見つめて行けば、必ず方向が見えて来るはずと思います。そして方向がみえてくればおのずと方法が見つかるはずだ。私は、今回のこの成果を生かし、まずポルトガルより始め、そしてイタリアと推し進める作業をするべきと思います。三国間の特産品の相互の発掘と改良そして流通で経済的繋がりが出来ないだろうかと考えています。たとえば、ショップを福岡市や大阪や東京につくるより、ポルトガルのエヴォラ市やイタリアのキエーティに置いてもいいかと思います。そこで各種のめんを食させ、めんのヨーロッパの発信基地にしてはどうかと考えています。エヴォラでは小麦粉を麺にする文化がないと歓迎式典の場で市長に直接聞いてわかったからです。

もう交流は始まっています。９月２２日には、ポルトガル駐日大使のジ

８少年が行う
４５０年記念碑の除幕式

ヴァリニャーノ神父の除幕式
キエーティ財団の
ディ・ニシオ理事長の挨拶

ョゼ・デ・フレイタス・フェラース氏とポルトガル全権大使の四宮氏、イタリアからは、キエーティ財団のディ・ニシオ理事長が出席されています。当日は、８少年も全国より全員集まり３国の国旗掲揚や除幕式を手伝っていました。

最後になりましたが、今回いろいろの体験をさせていただき、有意義の時間を持たせていただき感謝申し上げます。私は、天正４少年が立ち寄り地域の人たちと触れ合ったその場に立つと当時のことが目に浮かぶようです。幼い少年たちが新しい文化を日本に持ち帰り伝えるため、命をかけて来たその信念は、我々も見習う必要があると思う。キリスト教ばかりではなく、人間として見聞きした知識を生かせる環境が当時の日本になかったことが残念ではあるが、ヴァリニャーノ神父がグウテンベルグ印刷機と活字を購入し随行及び同行者に技術を習得させ、日本に持ち込んだことも成果と言えます。そして長崎県が印刷業が何故か多いのに気づくはずです。

夢のような体験を通じ４少年の思いを重ねて少しでもこれからの地域社会に貢献できることを願いつつ紀行記を閉じたいと思います。

長い間お読みいただき深く感謝申し上げます。

また、世界の何処かをこれからもお伝えできる日を

楽しみにしております。

ありがとうございました。

８少年が帰ってきた
４５０年記念式典にて

ヴァリニャーノ神父の
胸像の製作者

ローマ時代の風呂が見つかった
エヴォラ市役所玄関にて

大聖堂のヴァリニャーノ神父
胸像にて

食べたら癖になる
タコとエビのリゾット

左がポルトガルの金平糖で小さいが
味に深みがある。右は日本のもの

■２０１２年８月８日（水）教皇ベネディクト十六世に謁見■

■２０１２年（平成２４年）８月８日（水）午前１０時３０分から、カステル・ガンドルフォ教皇公邸前のピアッツァ・デッラ・リベルタ（自由広場）で、教皇ベネディクト十六世に謁見（３２２回）。この謁見の中で教皇は、司祭、説教者兄弟会（ドミニコ会）の創立者の、グスマンの聖ドミニクス（Dominicus 1170頃－1221年）の祈りの生活についてお話しされました。（原文はイタリア語です。）

親愛なる皆様

本日、教会は、司祭、説教者兄弟会（ドミニコ会）の創立者である、グスマンの聖ドミニクスを記念します。先の講話の中で、私は、すでにこの著名な人物と、彼が当時の教会の刷新に対してなした根本的な貢献についてお示ししました。本日、私は聖ドミニクスの霊性の本質的な側面を強調したいと思います。すなわち、彼の祈りの生活です。聖ドミニクスは祈りの人でした。神に心を捕らえられた彼は、ただ、人々の霊魂、とくに当時の異端の網にかかった人々の霊魂の救いのみを望みました。聖ドミニクスはキリストに倣う人として、三つの福音的勧告（清貧・従順・貞潔）を徹底的に実践し、みことばの宣教と貧しい生活のあかしを結びつけました。彼は聖霊の導きのもとに、キリスト教的完徳の道を進みました。あらゆるときに、祈りは、彼の使徒的活動を刷新し、ますます実り豊かなものとする力となりました。

聖ドミニクスの後継者としてドミニコ会を導いた福者ザクセンのヨルダヌス（Jordanus de Saxonia; Jordan von Sachsen　1237年没）は、こう述べます。「昼間、彼よりも人付き合いのよい人はいなかった。‥‥夜もまた、彼ほど熱心に目覚めて祈る人はいなかった。彼は昼を隣人にささげ、夜を神にささげたのだ」（P. Filippini, San Domenico visto dai suoi contemporanei, Bologna 1982, p. 133）。私達は、聖ドミニクスのうちに神の神秘の観想と使徒的活動の調和的な融合の模範を見いだすことができます。聖ドミニクスのそば近くにいた人の証言によれば、「彼はつねに神とともに、神について語りました」。この所見は、聖ドミニクスが主と深く一致していたこととともに、彼が他の人をこのような神との交わりへと導こうと努めたことを示します。聖ドミニクスは祈りに関する著作を残しませんでしたが、ドミニコ会の伝統は、『聖ドミニクスの祈りの九つの方法』という標題の書物のうちに、彼の生き生きとした体験をまとめ、伝えています。この書物は、あるドミニコ会士によって1260年から1288年の間に書かれました。それは、聖ドミニクスの内的生活の一側面を理解する助けとなるとともに、どれほど困難でも、いかに祈ればよいかをわたしたちが学ぶ上でのなにがしかの助けとなります。

それゆえ、聖ドミニクスによれば、祈りの九つの方法があります。これらの方法の一つひとつ（聖ドミニクスはそれをつねに十字架につけられたイエスのみ前で実践しました）は、身体と精神の態度を表します。この二つの態度は、密接に補い合いながら、精神の集中と熱意を深めます。最初の七つの方法は、神との一致、三位一体の神との一致を目指す歩みの段階として、上昇の道をたどります。聖ドミニクスは、へりくだりを表すために、立って頭を垂れて祈ります。自分の罪のゆるしを願うために地にひれ伏します。主の苦難にあずかるために、ひざまずいて悔い改めます。最高の愛を観想するために、手を広げ、十字架につけられたかたに目を注ぎます。天に目を向け、自分が神の世界に引き寄せられるのを感じながら。それゆえ、祈りの姿勢には三つあります。立つこと、ひざまずくこと、地にひれ伏すことです。しかし、いずれの場合にも、十字架につけられた主につねに目を注ぎます。　しかし、私が、簡単に考察したい最後の二つの方法は、聖ドミニクスが通常実践していた二つの信心業に対応します。第一は個人としての黙

想です。黙想において、祈りはますます内的で、熱意に満ち、力を与えるものとなります。時課の典礼を唱え終わった後や、ミサをささげた後、聖ドミニクスは時間の制限を設けることなしに、神との対話を続けました。彼は落ち着いて座り、耳を傾ける態度をもって自分自身に精神を集中させ、書物を読んだり、十字架につけられた主に目を注ぎました。彼はこの神との関係の時を深く過ごしたので、場合により、外からも、彼が喜んだり涙を流したりする姿を見ることができました。それゆえ、黙想によって、彼は信仰の内容を内面化しました。目撃者が語るところによれば、彼はときには一種の脱魂に陥り、顔を輝かせました。しかし、天上から来る力に強められた彼は、その後すぐに、へりくだりのうちに日々の活動を再開しました。また、修道院から修道院へと旅する間にも彼は祈りました。彼は同行者とともに、朝の祈り、昼の祈り、晩の祈りを唱え、谷や丘を通るときは被造物の美しさを観想しました。そのようなときに、彼の心から神への賛美と感謝の歌が湧き起こりました。多くのたまもの、とくに、キリストがもたらしたあがないという、最大の奇跡のゆえにです。

親愛なる友人の皆様、聖ドミニクスは次のことを思い起こさせてくれます。すべてのキリスト信者が、家庭の中で、仕事や社会的活動を行うとき、また休暇の際にも、信仰のあかしの出発点としなければならないのは、祈りです。神に個人的に触れることです。この神との実際の関係だけが、すべての出来事、とくに苦しみの時を深く生き抜く力をわたしたちに与えるのです。聖ドミニクスは、わたしたちが祈るときの外的な姿勢の重要性をも思い起こさせてくれます。ひざまずくこと、主のみ前に立つこと、十字架につけられた主に目を注ぐこと、しばしの間、沈黙のうちに精神を集中させることは、二義的なことではありません。むしろそれは、わたしたちが全人格をもって内的に神との関係に入る助けとなります。私は、私達の霊的生活にとって、日々、静かな心で祈る時間を見いだすのが必要なことをあらためて強調したいと思います。わたしたちはとくに休暇の間、このような祈りの時をもたなければなりません。神と語るために少しの時間をとらなければなりません。それは私達の周りにいる人を神の現存の輝く光に導き入れる助けともなります。神こそが私達が必要とする平和と愛をもたらすかたです。ご清聴ありがとうございます。

■これまでの経緯

再度このような機会が、私の人生に再度巡ってこようとは思ってもいませんでした。口之津開港450年記念事業として「平成遣欧少年使節」名が南欧に派遣されることとなり、わたくしも同行させてもらうことにいたしました。１４名（子供８名）で、他にテレビ局の撮影カメラマン１名が参加し、天正遣欧使節の足跡を辿るもので、ポルトガル、イタリア、バチカン市国を１１日間かけての訪問です。

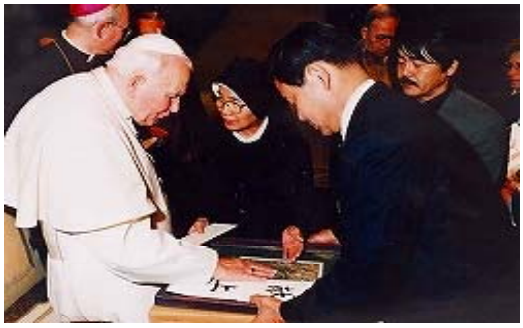
この訪問は、平成９年に遺跡文化事業街おこし推進事業の事務局及び推進委員（スペインとの交易担当）として、両国相互に交易担当者を常駐させる計画で、ジェトロなど廻わり事業を進めていました。同時期に銅版画が復元され、急遽ローマ法王に献上することとなりました。その銅版画は、慶長２年（１５９７年）有家のセミナリオで学んでいた日本人画学生によって制作されたもので、原図は，スペインのセビリア大聖堂内の１５世紀末イタリア系後期ゴシック様式の壁画で、１６世紀のオランダ人ヴィレックスが銅版画で写し，それがわが国に請来され本図の手本となった。銅版画「聖家族」（県指定有形文化財）と共に明治２年（１８６９年)、プティジャン神父がマニラで入手し、ローマ教皇ピウス８世に献上した。教皇は、日本におくべきものとして、プティジャン神父に返し、大浦天主堂に収蔵されたのち今日に至っている。

その模様は、１９９８年１２月２３日、バチカン市国はパウロ６世ホールにて、ローマ法王ヨハネ・パウロ２世の壇上に上り、持参した復刻銅版画を手渡した。法王は説明を聞き終えると、右手を版画の上にのせ、「ながさき　ありがとう」とはっきりした日本で謝意を表された。

版画にとって、バチカンが父とすれば、セビリア大聖堂は生母である。版画が「セビリアの聖母」と呼ばれる由来は、聖堂内に描かれた「アンティグア（古代）の聖母」という有名な壁画を模しているからである。コロンブスもその壁画の前に跪き祈って航海に出たという。因に、彼の墓はこの聖堂内に今も安置されている。壁画は、５００年前に描かれたとは信じられぬ新鮮な光を今も放っている。マニラで発見したプチジャン司教によって献上され、日本にとって貴重なものとして長崎に返された経緯がある。

平成１０年（１９９８）１２月２１日からの訪問でしたが、諸般の事情にて参加できなかった思い出があります。そこで、銅版画の復刻版と共に、監修製作した「ハイブリッド輪状二層めん」を献上することにしました。それは、**桐箱、和紙、線香巻き、２本だけを白絹で丁寧に包み、そして桐箱を紫絹布で包み、５箱を作成して、１箱を手元に置き、４箱を送り出しました。ローマ法王に献上、スペインセビリア大聖**

堂に献呈、セビリア市長に贈呈、セビリア商工会議所会頭に贈呈のためです。この輪状二層めんは、通常同一麺帯であるが、異質の麺帯の組み合わせであり、外が固く中心にゆくほどやわらかい「ふくよかな食感」を追求し、伝統的な製法に新たな技を加え完成させています。お湯の浸透早いので茹であ早く、煮くれ及び茹でのびし異質麺帯の最大利点を極限まで引き出した世界に例がない手延べ製法による特殊麺です。ラー王が機械の二層麺ですが、その以前に開発した画期的な特殊めんです。**「幾多の迫害や重税に堪え忍び、農業の副業として携わってきた手延べそうめんも、地球上最大の産地を形成するに至りました。明日を夢見た先人、命を支え続けながら食文化の歴史を育み、そして味わいの中に幾世代の心を今に伝える島原手延べそうめんを、ここに献上いたします。」本文は桐箱の中蓋に刻印した原文です。**



■プロフィール

木村優仁（きむらまさひと）
（Kimura Masahito）

■【著者】木村優仁
長崎県南島原市生まれ
総務省　行政相談委員（長崎行政相談委員協議会　役員）
南島原市商工会　組織改革推進室　　室　長
南島原くらしの総合行政相談所　　所　長
南島原市個人情報保護審議会　　委員長
アンデス生物食文化研究所　　主　宰
NOP法人障害者自立支援センター　　相談役
NOP法人障害者就労支援センター　　顧　問
一般社団法人　しんらい長崎　　理　事
インターナショナル・パブリック・オンブズマン
所属学会（国内）日本オンブズマン学会(学会)同志社大法科大学院
（国外）アジアオンブズマン協会（学会）パキスタン
（国外）国際オンブズマン研究所（学会）オーストリア

ローマ法王庁の避暑地
カステル・ガンドルフォ城
（Castel Gandolfo）

ＰＣ Mail　arie@minamishimabara.com
携帯 Mail　international-ombudsman@softbank.ne.jp
固定電話　0957-82-5923
携帯電話　090-1362-0138
ＰＣサイト　http://www.minamishimabara.com
携帯サイト　http://www.minamishimabara.com/m/
■　２０１２年９月１１日発行【南欧の風に吹かれて】
発行者　木村優仁　　発行所　アンデス生物食文化研究所
〒 859-2205 長崎県南島原市有家町小川長寿村１丁目１番地
電話　0957-82-5923
URL　http://www.andes-wind.com/sweden.html
URL　http://www.andes-wind.com/roma.pdf
印刷製本　NOP 法人障害者自立支援センター